

◆ 全文翻訳 ◆

米国における保育

保育は米国の多くの家庭にとって、まさに人生の現実になりつつある。妊娠後、労働力に参入あるいは留まったりする女性の数が増え（注：子どもが生まれるため収入を増やす必要上か）、また一人親も増えるにつれて、乳幼児や子どもの保育を母親以外に任せる家族が増えつつある。1975年には、6才未満の子どもを持つ母親の39%が家庭の外で働いていたが、現在、その割合は62%である（労働統計局）。こうした母親のほとんどが、出産後3～5カ月で仕事に復帰するため、子どもたちは乳幼児期のほとんどをさまざまな保育状況で過ごすことになる。

「乳幼児保育に関するNICHDの研究」について

「乳幼児保育に関するNICHDの研究」は、保育における多様性が子どもの発育にどのように関係するか調べる、今日、最も包括的な保育についての研究である。1991年、国立小児保健・人間発達研究所（NICHD）の支援を受けた研究者チームは、1364人の子どもに研究に参加してもらい、その後7年間にわたり、ほとんどの子どもについて追跡調査を行った。過去2年間、生後3年間の保育と子どもの発育との関係について研究結果を発表してきたが、今後も全米10カ所にある保育研究拠点から集めた情報の分析を続ける予定である。

乳幼児保育に関するNICHDの研究は、どのような問いに答えるのか

この研究は、保育は子どもにとってよいことか、あるいは悪いことかという普遍的な問いかけを超えて、保育のあり方の違いについての側面——たとえば質と量——が、子どもの発達のさまざまな側面にいかに関係するかに焦点を当てることで、われわれが子どもの発達と保育との関係を理解するのを助けることが目的である。より具体的に言うと、認知・言語発達、母子関係、自制、素直さ、問題行動、同年代の子どもたちとの関係、身体的な健康と、保育との関係を評価している。

研究に参加した子どもと家族：どんな人たちか

1991年に始まった研究には、米国中からさまざまな経済的・人種的背景の子どもたち合計1364人とその家族が参加した。対象家族は全米10カ所で採用され、その社会経済的背景、人種、家族構成もいろいろであった。76%の家族が非ヒスパニック系白人、13%近くが黒人、6%がヒスパニック系、1%がアジア系／太平洋諸島系／アメリカ・インディアンで、4%がその他の少数民族である。これは米国全体の人々の人種構成を反映している。こうした多様性によって、異なる民族出身の子どもたちが、保育の異なる特徴に、違う形で影響を受ける可能性が調査できる。

人種の多様性を反映させただけでなく、い

ろいろな学歴の母親とそのパートナーを参加者に含めた。母親の約 10 %の学歴は 12 年生未満で、20 %強が高校を卒業している。3 分の 1 がなんらかのカレッジを卒業しており、20 %が学士号を取得、15 %が大学院あるいは専門的な学位の保持者である（米国人口全体では、それぞれ 24 %、30 %、27 %、12 %、6 %である）。

社会経済的な地位については、研究に参加した家族の平均所得は 3 万 7781 ドル（約 400 万円）であった（米国家庭の平均所得は 3 万 6875 ドル）。そして、研究参加者のおよそ 20 %が国の生活補助を受けている。

この研究に参加した子どもたちは、どのような種類の保育を利用したか

この研究では、研究者ではなく親が、子どもが受ける保育の種類と時期を決定した。事実、家族は、保育を利用するかどうかの計画に関係なくこの研究に参加した。子どもたちは、いろいろな育児・保育環境におかれた。父親、他の親戚、在宅保育者、家庭保育者、保育園による保育などである。保育の状況は、正式な訓練を受けた保育者が一人の子どもを預かるものから、何人かの子どもを預かる保育所のプログラムまで、さまざまであった。乳児の半数近くが最初に受けた育児・保育は、親戚によるものだった。しかし、生後 1 年、またその後にかけて、保育所と家庭でのケアの利用への移行が見られた。

本研究では、保育の種類を管理したり選択したりせず、同時に保育の質も管理したり選択したりしようとはしなかった。保育の質は数種類の 방법으로測定され、非常にばらつきがあ

った。しかし、全国規模で保育の質を測定した研究はないので、本研究における育児・保育が、全国的な子育てのあり方の代表としてどれだけ適切か判断する方法はなかった。

育児・保育・家族、子どもに関するどのような情報を考慮したのか

研究チームは子どもとその環境にかかわる数多くの特徴について、さまざまな種類の情報を集め、研究した。子ども対大人の比率やグループの大きさなどの保育の特徴とともに、保育の質や保育を受ける時間、保育開始年齢、ある子どもが同時に、また長期間に経験した異なる保育環境の数など、子ども一人ひとりの保育経験を評価した。家族の経済状況や家族構成（一人親またはパートナーのいる親）、母親の語彙（知性に代るもの）など、家族の特徴も評価した。その他家族に関しては、母親の学歴、心理的な適応性（アンケートによる測定）、育児姿勢、母子間の相互作用の質、そして子どもの最適な発育のために家庭環境がどの程度貢献しているかなどの項目を分析に含めた。性別や性格など、子ども一人ひとりのさまざまな特徴も考慮した。

この研究では、家族や子どもの性格による影響に加え、育児・保育の特徴と経験がどのように子どもの発達に独特な貢献をしているか明らかにしようとしている。これまでの研究で、一般的に家族内で子どもが受ける育児の質は、保育における質と非常に似通っていることが立証されている。そこで、当研究チームは、保育が子どもの発達に貢献しているこの他の点について重点的に調べることにした。

データは子どもの発育についてのさまざま

な研究問題に答えるべく、いろいろと異なった方法で分析されたため、必ずしもすべての項目が分析に含まれるわけではない。以下に報告する研究結果の要約には、関連項目のリストが記されている。

乳幼児保育に関する NICHD の研究： 私たちは何を学んだか

多様な情報源（親、保育者、訓練を受けた観察者、試験者）を使い、生後 7 年間にわたり、家族環境、育児・保育環境、子どもの発達、身体的な成長と健康状況に関する細かい情報を集めた。

参考文献（CRN ホームページ参照）に記載されるように、今日までに本研究に関する論文はいくつかの科学関係の学術誌に発表されている。また、他の研究結果については、学会で発表されたり、出版準備が進められている。「NICHD 乳幼児保育研究」チームが共同執筆した論文では、研究問題が幅広く取り上げられている。

研究結果は、おもな 4 分野に分類できる。最初の記述的な成果では、NICHD の研究に参加した子どもたちが受けた保育のイメージを描写している。これには、大人対子どもの比率、生後 1 年間に受けた保育の形、貧しい子どもの保育などの「管理可能」な特徴についての調査が含まれる。他の分野は、保育を受ける子どもにとっての家族の役割、子どもの発達と保育との関係、母子関係と保育との関係だ。こうした分野のなかで、より裕福な家庭と低所得家庭の子ども、また、非ヒスパニック系白人と少数民族の子どもにとって、保育経験がどの程度彼らの発達に関連しているか

を比較し、その結果が示されている。さらに、子どもの行動あるいは母子間の相互作用の度合いを予測するものとして、現在と過去との保育経験の比較もなされている。

NICHD の研究における保育の詳細な報告

1. 生後 1 年間の保育経験歴

子どもが保育を受けた時間の長さは、いろいろであった。平均的な保育時間は週に 33 時間であったが、これも子どもとその家族の民族性によって異なる。非ヒスパニック系白人は保育時間が最も短く、非ヒスパニック系黒人は最も長かった。ヒスパニック系白人とその他の民族は、その中間に位置している。

一般的に、ほとんどの乳児が生後 1 年間に 2 種類以上の育児・保育環境を経験していた。乳児の半数近くは父親／パートナー、あるいは祖父母による育児が最初の育児経験で、20 % 強が家庭保育、保育園に預けられたのはわずか 8 % だった。ほとんどの乳児は 4 カ月になる前に保育を経験している。

全体的にみて、研究結果は乳児保育への高い依存度ときわめて早い時期の保育の開始を示している。ほとんどの乳児は生後 1 年間に保育所ではなく、公的ではない保育環境で過ごしている。

2. 貧困は保育経験と関連性があるか

本研究に参加した家族・子どもの 35 % 近くが、貧困状態あるいはそれに近い状態で生活している。貧困は、家庭の経済状況を測る標準的な方法である所得対必要生活費率によって定義された（米国商務省）。これは、連

邦政府からの補助金を除いた家計所得を、その世帯に当てはまる貧困水準所得で割って計算する(1991年現在の4人家族の貧困水準所得は、1万3924ドル)。本研究に参加した家族のうち、所得対必要生活費率が1.0を下回る家族は16.7%、1.0～1.99の家族は18.4%であった。

研究チームは、生後1年間の貧困が、保育開始年齢や保育の種類、質・量と関連性があるか質問した。貧困が利用する保育の特徴を決定する要因になるかを判断するため、貧困家庭およびその子どもたちを(所得対必要生活費率1.0未満)、貧困に近い家庭と子どもたち(所得対必要生活費率1.0～1.99)あるいは、より裕福な家庭と比較した。

保育開始年齢については、貧困状態に陥り、抜け出した家庭(一時的貧困といわれる)が、生後3カ月前という非常に早い時期に保育を始める傾向が最も高かった。そこで研究チームは、この保育の早期開始は、家族を貧困から抜け出させるために、母親が長時間の雇用に就く必要があるためではないかと仮説を立てた。一貫して貧しく、国からの援助を15カ月以上受けていた家庭では、早期保育や、生後15カ月の時点でなんらかの保育を受ける可能性はより低かった。

貧困家庭は、他の家庭に比べて、どのような保育であれ利用する可能性が低い。利用している場合は、他の所得グループの家庭と同じぐらいの時間を保育にあてていた。15カ月時点で保育未経験の子どもの母親は教育レベルが最も低く、大家族の出身であった。こうした大家族も、継続的に貧困状態におかれる傾向にある。

一般的に、家庭環境で(家庭保育者あるい

は家族によって)保育を受けた貧困家庭の子どもたちは、比較的、質の低い保育を受けていた。一方、貧困家庭の子どもで保育園に預けられた場合、裕福な子どもが受ける保育園での保育と匹敵する、より質の高い保育を受けていた。貧困に近い家庭の子どもたち(所得対必要生活費率1.0～1.99)は、貧困家庭の子どもたちよりも質の低い施設での保育を受けていた。これは、おそらく、貧困に近い家庭の子どもたちは、貧困家庭の子どもたちが受ける資格のある補助金付きの保育を受ける資格がないからであろう。

まとめると、貧困家庭また貧困に近い家庭の乳児は、比較的質の低い保育を受ける可能性が高い。これは、生後1年間、ほとんどの乳児が保育園に預けられないのが一因である。

3. 質の高い保育を構成する保育の特徴

研究チームは積極的な保育、つまり質の高い保育に寄与する特徴とは何かを見極めるために、さまざまな保育環境を研究した。積極的な保育は、相互作用の頻度を観察・記録し、その質を格付けすることで測定される。また、保育環境も、グループの大きさ、大人対子どもの比率、物理的な環境などの「管理可能な」特徴あるいは政府のすすめるガイドラインの観点、さらには正式な教育や専門訓練、保育経験、育児に対する信念など、保育者の特徴という観点から測定された。

調査の結果、次のことがわかった。すなわち、他と比べて安全で清潔であり、刺激的な生活環境を有し、小規模グループで、大人1人に対する子どもの比率が低く、子どもに感情を表現させ、その意見を取り入れる保育者

のいる割合の高い保育環境においては、より子どもの心を読み取る力が強く、敏感で、知的な刺激を与える保育者がいた。つまり、よりよい子どもの発達に結びつくであろう保育の質である。

4. 人口統計学的特徴と家族の特徴:利用される保育の種類と関連性があるか

本研究の目的の一つは、人口統計学上の変数そして家族についての変数が、各家庭の利用する保育の種類にどの程度関係するか調べることであった。研究チームは、人口統計学的特徴(民族、母親の学歴、家族構成)、経済的特徴(母親や家族の所得)、家族の質の特徴(母親の姿勢と信念、家庭環境の質)などの3組の変数を検証し、保育開始年齢、保育の種類、質・量との関係を調べた。

家計は、おもに保育の量、開始年齢、種類、質に影響を及ぼしている。母親の所得への依存度が高い家庭では、依存度が低い家庭に比べて早期に保育を開始し、保育にかかる時間も長かった。母親が被雇用者で最高所得額を得ている場合、生後3~5カ月で乳幼児保育を開始する可能性が高く、生後15カ月間に在宅保育を利用する可能性が最も高かった。最低所得層と最高所得層の家庭の子どもは、中間所得層の子どもよりも質の高い保育を受けていた。

経済的な要素(母親および家族の所得)とは別に、母親の就業が子どもの成長に良い影響を与えると信じる母親は、乳児の時に保育を開始し、多く利用する選択をしていた。一方、就業が子どもにリスクを与えると思う母親は、形式によらない、家族中心のあるいは在宅での保育を選ぶ傾向にあった。就業が子

もに与えるリスクは低いと考える母親は、保育所あるいは家庭での正式な保育を利用する可能性が高かった。

5. 長時間保育を受けている子どもと、母親がほとんど全面的に世話をしている子どもへの家族の影響

本研究のもう一つの目的は、母親がほとんど全面的に世話をしている子ども(保育時間が週10時間未満)と長時間保育を受けている子ども(保育時間が週30時間超)の発育における家族の影響を比較することである。

家計や母親の学歴などの家族の特徴は、子どもの発育を予測するうえで効果的な指標となる。これは、母親の世話をほとんど全面的に受けている子どもの場合も長時間保育を受けている子どもの場合も同様である。ここでの結果は、子どもの発育への家族の影響は、両親以外が長時間保育しても大きく減ったり変わったりすることがないことを示した。

6. 保育と母子の愛着の関係

研究チームは保育の量、保育開始年齢、保育の種類など保育についての変数をいくつか検証し、こうした要素が乳幼児の母親への愛着にどれだけ関係するか調べた。愛着とは、母親への信頼感のことである。

研究チームは、生後15カ月の時点では、保育自体が乳幼児の母親への愛着の安定性に悪影響を与えることもなければ促進することもないことを発見した。愛着は、30分間に母親と子どもを離れさせてから、また一緒にするという標準的なやり方で測定した。

確かに、ある特定の保育条件と特定の家庭環境との組み合わせは、乳幼児の母親へ

の愛着が不安定になる可能性を高めた。質の低い保育を週に10時間以上受けた場合、あるいは生後15カ月間に2カ所以上の保育環境におかれた場合は、母親がやや思いやりに欠ける場合に限るものの、母親への愛着が不安定になる可能性が高い。たとえば、子どもの心を読み取る力が強く細やかな子育てという点で、母親と保育者の両方が調査対象人口の下位25%に入る場合、子どもが母親に安定した愛着を持つ可能性は、ほんの45%だった。対照的に、より思いやりの深い母親と保育者の場合は、62%が安定した愛着を持っていた。

7. 保育と母子間の相互作用の質

子どもの母親への愛着の分析に加えて、保育と母子間の相互作用、または母子間の交流との関係についても研究した。研究対象となった母親の行動は、子どもの心を読み取る細やかさ、積極的な関与と否定的態度である。子どもの行動は、その関与を評価するために観察された。研究者は保育の質、量、家族の特徴（母親の学歴と所得）を分析し、子どもが6カ月、15カ月、24カ月、36カ月時点での母子間の相互作用との関係を調べた。

母子間の相互作用は、遊びの時間や家庭で母子が一緒にいるところをビデオに撮影し、母親の子どもに対する態度を観察した。具体的には、複数の相対する作業に直面した時に（例：子どもを見守りながら、インタビューと話をする）、母親がどれだけ注意深く、敏感で、積極的な愛情を見せ、あるいは抑制的な態度を見せるか観察した。

研究者は保育の質・量と母子間の相互作

用の質とに、わずかではあるものの統計的に重要な関係があることを発見した。保育の量が増えるにつれて、母子間の相互作用の細やかさや親密さが薄れるという関連性が、ささやかながら現われた。生後3年間を通じて母親以外のケアを受ける時間が長いほど、子どもに対する母親の積極的な行動がいくらか減少した。保育を受ける時間が長かった乳幼児は、母親との関与がやや薄かった。

これまでの調査で明らかになった保育の量と母子相互作用との間に、このような関連性が発見されたことで、研究チームは乳幼児期の保育の量が、その後の母子相互作用の質に関係するだろうかという疑問へと導かれていった。

研究者は、36カ月の時点で、生後6カ月の間の保育時間が長いほど、母親の子ども的心を読み取る細やかさが減少し、子どもへの積極的な関与が低いことを発見した。しかし、子どもの保育経験よりも所得や母親の学歴、両親が揃っていること、母親の離別の不安、母親の気分的な落ち込みなどの家族と家庭の特徴の方が、母子相互作用の質に深く関係していた。

質の高い保育（保育者と子どもの積極的な相互作用）は、母親による関与と子ども的心を読み取る細やかさの増加（生後15カ月と36カ月の時点）、子どもと母親の積極的な関与（生後36カ月の時点）の増加とささやかながら関係があった。質の高いフルタイムの保育を利用している低所得の母親は、保育を利用していない低所得の母親あるいは質の低いフルタイムの保育を利用している低所得の母親に比べて、6カ月の時点で、積極的な関与の度合いが高かった。

8. 保育と素直さ、自制、問題行動

保育の特徴(質、量、保育開始年齢、種類、安定性)と家族の特徴を検証し、それがどのように子どもの素直さ、自制、問題行動と関係しているかを調べた。その結果、子どもの保育経験よりも家族の特徴(とくに母親の子どもの心を読み取る細やかさ)の方が、子どもの行動に強い関係があることがわかった。

研究者は、保育の特徴は子どもの素直さ、自制、問題行動と、ささやかな関係がある程度だと判断した。このなかで、保育の質は、子どもの行動と最も一貫した関連性を持っていた。より細やかで繊細な配慮が受けられる保育に預けられている子どもは、2～3歳時点で、保育者が報告した問題行動の数が少なかった。

生後2年間に保育に預けられる時間が長いと、2歳の時点で保育者が報告する問題行動は多かったが、こうした影響は3歳までには消滅していた。3人以上の子どもとグループで時間を過ごすことの多かった子どもは、行動に関する問題(保育者による報告)がより少なく、保育におけるより強い協調性が見られた。

9. 生後3年間の保育と子どもの認知・言語発達

本研究のもう一つのおもな目標は、保育の特徴(質、保育時間、種類、安定性)が、子どもの認知・言語発達や就学レディネスに関係するかどうか判断することであった。子どもの認知発達と就学レディネスは、標準テストを利用して測定した。言語発達は、標準テストと母親からの報告書を用いて評価した。質の高い保育は、積極的な保育の提供と言語的な刺

激と定義された。つまり、保育者がどれだけ頻りに子どもに話しかけたり、質問をしたり、子どもの問いに答えたりしたか、である。

生後3年間の保育の質は、子どもの認知・言語発達に、わずかながら一貫した関係を持っている。保育の質が高い(積極的な言語的刺激と子どもと保育者との相互作用が多い)ほど、15カ月、24カ月、36カ月時点での子どもの言語能力、2歳時点での認知発達が優れており、3歳時点での就学レディネスも高いことが示された。

しかし、ここでも、家計や母親の語彙、家庭環境、母親による認知的な刺激などの要素を合せると、これらの方が、15カ月、24カ月、36カ月時点での認知発達、および36カ月時点での言語発達と強い関係があった。

認知発達に関しては、母親による長時間の育児は子どもにとってなんらプラスにならないことがわかった。長時間、母親が世話をしている子どもの認知・言語測定での点数は、保育されている子どもと同じぐらいの事例が多かった。実際、長時間母親が世話をしている子どもと、保育を受けている子どもとを比べた時に、認知・言語結果において現われた数少ない差異は、長時間の母親による育児に比べて質の高い保育は有利で、質の低い保育は不利だということであった。保育者と子どもの相互作用の質を考慮した場合、週10時間以上保育されている子どものなかでは、保育所に預けられている子ども、そして、やや少ない度合いではあるが、家庭保育を受けている子どもは、それ以外の保育を受けている子どもに比べて認知・言語測定での成績がよかった。保育経験と子どもの認知・言語・就学レディネスとの関係では、さまざまな所得グルー

プあるいは民族的な背景による違いはなかった。

10. 規制可能な保育の特徴と子どもの発育

本研究のさらなる目的は、保育園の「管理可能」な面と子どもの発達との関係を調べることであった。教育者、小児科医、公衆衛生の専門家からなる専門機関の助言に従い、子ども対スタッフ比率、グループの大きさ、教師の訓練、教師の教育の4項目を分析に利用した。

研究チームは子ども対スタッフ比率、グループの大きさ、教師の訓練、教師の教育について、助言された4つのガイドラインすべてを満たしている保育園はほとんどないことがわかった。ガイドラインの遵守度が高い保育園に預けられている子どもは、36カ月の時点で、言語能力と就学レディネスがより高かった。また、24カ月と36カ月の時点では、問題行動も少なかった。ガイドラインを一つも満たしていない保育施設に預けられた子どもは、こうしたテストの成績が平均よりも低かった。

まとめ

「乳幼児保育に関するNICHDの研究」は1364人の子どもを対象とし、そのほとんどを7歳まで追跡調査し、異なる保育の形態が子どもの発達にいかに関係するか調べた。これまでの科学論文は、生後3年間を中心に書かれてきた。子どもの育児・保育環境は、そのコミュニティで提供される保育の種類、費用の手頃さなどを考慮し、家族が選んだものであり、無作為にさまざまな種類、質、量の保育に

振り分けたわけではない。研究に参加した家族は、多くの人口統計学的な特徴において、米国全体を代表するものであった。

NICHDの研究では、全米の家族にとって、家族の状況と家庭環境の質が、保育の選択と強い関係を持つ。そこで研究チームは、すでに十分に認識されている家族の特徴・状況と子どもの発達との関係という重要な点に加えて、子供の発育に保育がどのように独自に貢献しているか見出すことに焦点を当てた。

本研究の分析結果は、育児・保育に関する多くの質問になんらかの答えを与えるものとなるだろう。いま、多くの米国家庭がもつ育児・保育像を捉えることができるようになった。どのくらいの頻度で、どのくらい早期に保育が始まるか、また、今日の家庭の多くがどういった種類の保育環境を選ぶかなどを垣間見ることができる。研究ではまた、長時間保育を受けた子どもと母親がほとんど全面的に世話をしている子どもとを比較し、家族の特徴と子どもの発達との関係も検証した。そして、家族の特徴が乳幼児が受ける保育経験と関係があるかどうかを評価した。最後には、保育の特徴と、子どもの知的発達、言語発達、就学レディネスとの関係、および保育の特徴と母子関係との関連性を検証した。

研究チームは、家族や子ども一人ひとりの性格に加え、保育が子どもの発育に与える新たなあるいはマイナスの価値を探した。一般的に、保育の要素よりも、家族の特徴と母子関係の質の方が、子どもの発達に強い関連性をもっていた。これは、子どもが長時間保育を受けている場合でも、おもに母親が世話をしている場合でも当てはまる。

研究では、保育のある特徴や経験が、ほん

のわずかではあるが、子どもの発達に影響を与えることがわかった。研究の結果認められた保育の影響は概してわずかだが、取るに足らないとはいえないものである。

質の高い保育は、次の点に結びつくことが発見された。

- ・ 母子関係がよりよくなる。
- ・ 細やかさに欠ける母親の場合でも、乳幼児が不安定な愛着を持つ可能性が低い。
- ・ 子どもの問題行動の報告が少ない。
- ・ 保育を受ける子どもの認知能力が高い。
- ・ 子どもの言語能力が高い。
- ・ 就学レディネスが高い。

逆もまた真なりである。質の低い保育は、以下に結びつく。

- ・ 母子関係の調和度が低い。
- ・ すでに赤ちゃんの心を読み取る細やかさに欠ける母親の場合に、母子の愛着がさらに不安定になる可能性が高い。
- ・ 問題行動が多く、認知・言語能力、就学レディネスがともに低い。

より長時間の保育、あるいはより長時間の保育歴は、以下に結びつく。

- ・ 母子間の相互作用が弱い。
- ・ 2歳時点で問題行動に関する報告が多い。
- ・ 細やかさに欠ける母親の場合に、乳幼児が不安定な愛着をもつ可能性が高い。

より短時間の保育は、以下に結びつく。

- ・ 母子間の相互作用がよりよくなる。
- ・ 赤ちゃんの心を読み取る細やかさに欠ける母親の場合でも、乳幼児が不安定な愛着をもつ可能性が低い。
- ・ 24カ月における問題行動が少ない。

保育園での保育は、他の環境での同様の質の保育に比べ、認知・言語能力、就学レディネスともにより高い。グループ保育は、3歳の時点で、問題行動の報告の少なさにつながっている。したがって、乳幼児保育の経験は、子どもにとって意味があるといえる。

新しい保育環境に入る回数で測られる保育の不安定さは、母親が細やかさに欠け、敏感でない場合に、乳幼児が不安定な愛着をもつ可能性の高さにつながることがわかった。

本研究に参加した子どものほとんどは、現在、7歳で1年生である。研究チームでは、今後数年も、今回の調査では解明されなかった保育と子どもの発達との関係についての疑問を明らかにするためにデータの分析を続け、専門家会議や科学関係の学術誌を通じて、新たな研究成果を発表していくつもりである。

*「小児科診療」第63巻-第7号(診断と治療社)より抜粋。今回の研究に関する研究者・研究機関および参考文献一覧は、CRNのホームページを参照してください。

働く母親



「子育て生活基本調査」、「幼児の生活アンケート」、「総務庁国民生活基礎調査」、およびシンポジウム参加者アンケートから

高木 友子(郡山女子大学講師)

ベネッセ教育研究所が行った「子育て生活基本調査」、「幼児の生活アンケート」、そして本日この会場にいらっしゃる働くお母様などから寄せられたアンケートの回答をもとに、日本の働く母親の現状と、母親たちが今感じていることをご紹介します。皆さんの身近にいる働く母親の声に、しばし耳を傾けてみてください。

図1は、日本に働く母親がどのくらいいるのかを表したものです。□の部分には父親も母親も働いていることを、■の部分には母親だけが働いていることを示しています。「0歳～2歳」でこれらを合わせると約25%、「3歳以上」では40%以上の家庭で、母親が働いていることがわかります。つまり、4世帯に1世帯は母親も仕事を持っており、働く母親

は決して特別な存在ではないことがおわかりいただけるでしょう。

さて、そんな母親たちは、育児についてどのように感じているのでしょうか。図2は、「子育てはどれくらい楽しいですか」という問いを「フルタイム就労」「パートタイム就労」、そして「専業主婦」の母親に質問した結果を表したものです。■の部分には「とても楽しい」と回答した母親の比率です。これを見ると、「フルタイム就労」の母親が育児を「とても楽しい」と感じている割合が高いことがわかります。また、「子どもと一緒に遊んでいる時」や「子どもが園や学校での様子を話してくれている時」に「子育てをとても楽しいと感じる」と回答した母親の比率を見ると、「フルタイム就労」の母親が答える割合が最も高くなってい

図1 母親の就労割合

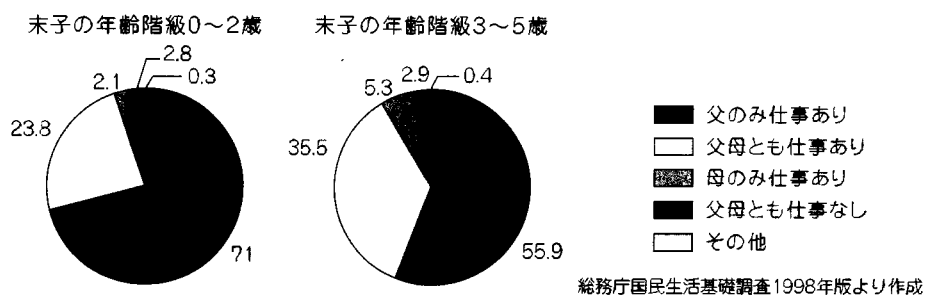
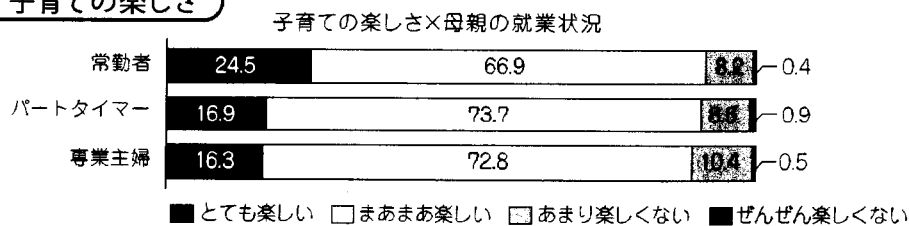


図2 子育ての楽しさ



ベネッセ教育研究所「子育て生活基本調査報告書」より作成

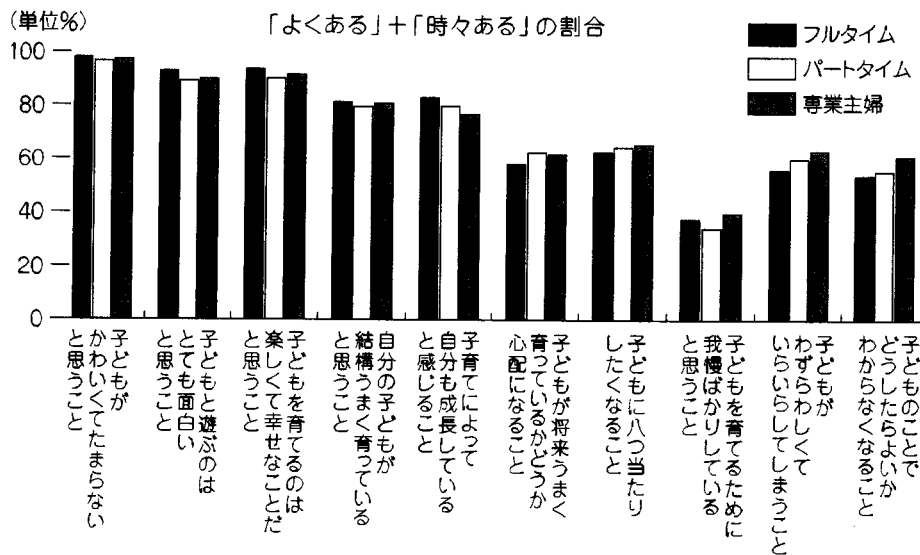
ました。

次に図3をご覧ください。左から5つ目までの項目は、子育てに対して肯定的な感情を抱いている母親の割合です。たとえば、「子育てによって自分も成長していると感じる」母親は、「専業主婦」よりも「フルタイム就労」のほうがやや比率が高いことがわかります。一方、6つ目以後の項目は、子育てに対する不安を抱いている母親の割合です。このような不安を感じている母親は、逆に「専業主婦」の方がやや比率が高いことがわかります。

主婦」の方がやや比率が高いことがわかります。

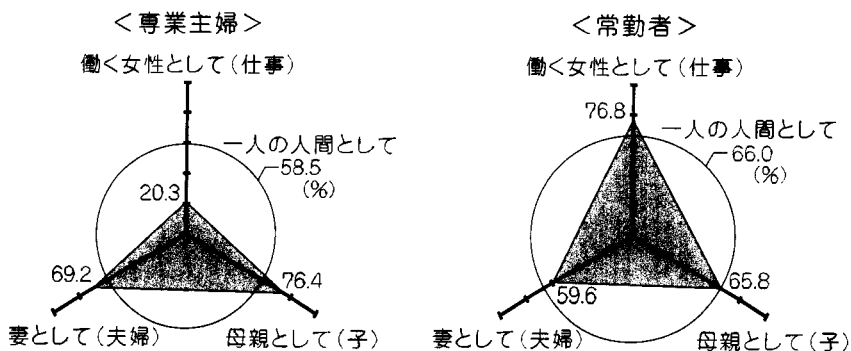
図4は「専業主婦」と「フルタイム就労」の母親の自己評価を表したものです。「フルタイム就労」の母親は、きれいな正三角形が描かれていますね。正三角形が描けるということは、母親のアイデンティティが安定していることを意味します。フリードマン先生のご報告にもありましたように、母親が精神的に安定していると、子育てにもいい影響が出ると考えられます。

図3 育児への感情



ベネッセ教育研究所「第2回幼児の生活アンケート」より作成

図4 母親の自己評価



ベネッセ教育研究所「子育て生活基本調査報告書」より作成

ここで、参加者アンケートを見てみましょう。働く母親たちは育児について「のびのびと育てたい」「スキンシップを大切にしたい」、でも「しつけもしっかりしたいし、「健康は大切に」しなきゃ、それから「子育てを子どもと一緒に楽しみたい」と考えています。しかし、一方では悩みや不満も抱えています。

何が問題かと申しますと、「どうしても時間が足りない」「父親が育児に関わってくれない」「育児に対してストレスを感じる」「なぜ仕事をを持っている母親にだけ負担がかかるのか」など。また、「仕事をやっていることで子どもに寂しい思いをさせているのではないか」「余裕がなくて子どもにじっくり向き合えていない気がする」といった声も多く聞かれました。

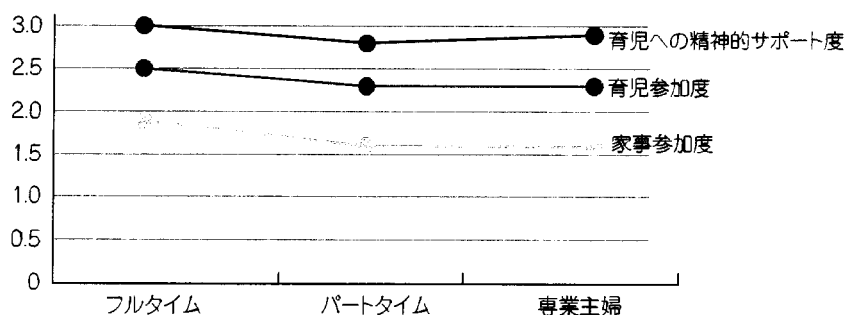
図5は父親の育児・家事への参加度を表したものです。「家事への参加度」が低いんですね。母親が「フルタイム就労」の家庭の方が父親の「育児への参加度」「家事への参加度」がやや上がる傾向はありますが、実際のところは母親への負担はまだまだ大きいのが現状です。参加者アンケートでも「子どもが小さいときは、ちょっとでも面倒見てくれると精神的にもホッとします」「一緒に子育てしてほ

しい」「子どもとたくさん遊んでほしい」「困っているときに協力してほしい」「相談にのってほしい」という声が寄せられていました。また、一方で「いくら父親に育児に参加したいという意思があっても、会社や社会が変わらないとそれを許してくれない」という声も寄せられています。父親にも育児に関わってほしい、そのためには社会が変わってほしいという声です。

そんな悩み多き母親が父親とともに頼りにしているのが、図6にあげた人(場)です。「母親」「友達」「会社の同僚」の比率が高くなっていますが、ご注目いただきたいのは、「幼稚園・保育園」「小児科医」の数値です。「フルタイム就労」の母親は、「幼稚園・保育園」を大変頼りにしていて、「小児科医」を頼りにする割合も「専業主婦」や「パートタイム就労」の母親に比べると高くなっています。こういう方々を頼りにして、働く母親たちは育児を頑張っているわけです。

しかし、何かあったときに、保育士の先生や周囲の方から、「『お母さんが働いていらっしゃるから』と言われるのがとてもつらい」という話を聞いたこともあります。自分を責めて、

図5 父親の育児・家事への参加



*数値は、父親の関わりについて項目ごとに1点から4点までの得点化を行い、上記3つの領域について平均得点を算出したもの。数値が大きいほうが関わり度が高い。

ベネッセ教育研究所「第2回幼児の生活アンケート」より作成

ぎりぎりのところで頑張っている母親も少なくありません。そういう母親をさらに周囲が責め、追い詰めることが、はたして母親のために、そして子どものためになるのかと、最近考えます。

最後に、CRN が開設しているホームページのフォーラムからのエピソードをご紹介します。ある保育士の先生が1歳児のクラスを受け持っていた時のお話です。その先生が「お母さんと私と2人で協力して一生懸命育てましょう」とある母親に言ったそうです。それから20数年経ちました。たくさんの子どもを受け持ってきたわけですから、一人ひとりの子どものことが日々頭のなかに残っているというわけではありませんね。忘れた頃になってその先生のところに、あの母親から娘さんの結婚式の招待状が届いたそうです。結婚式当日、その会場に参りましたら、その母親が涙を流しながら、「あなたがいてくれたから、この子はこんなに立派になりました」とおっしゃったそうです。

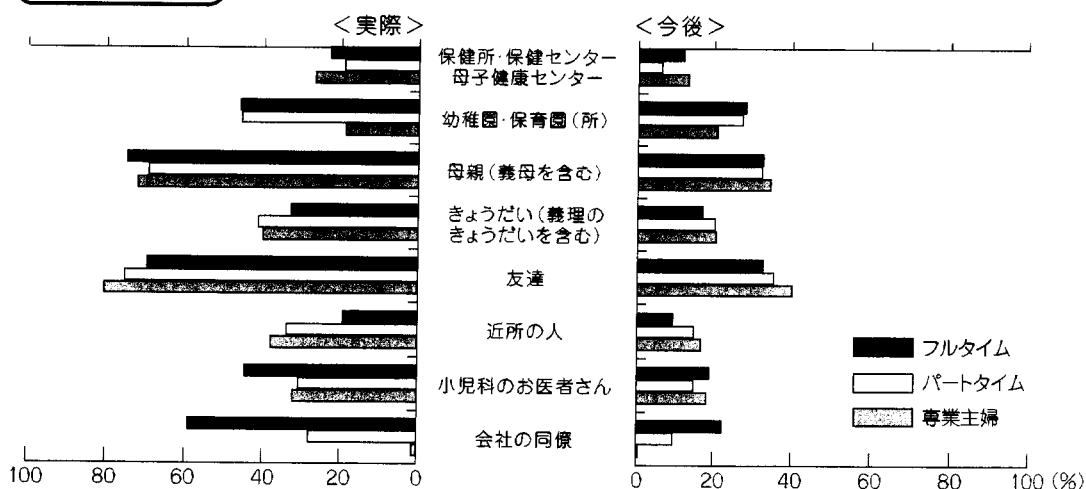
では、子どもはどう思っているのでしょうか。フォーラムから集めた意見で、もう成人された方が自分の子ども時代を振り返って「仕事を

持っている母親にこんなふうに言ってほしかった／こう言ってもらえれば安心できた」という言葉として、「仕事で参観日に行けなくて、あんたのおかんはここにおるやろ。寂しがらんでもよろしい。なんかあったらとんでいく。あんたが元気やから、おかんは仕事ができるねん」をあげていました。「何かあったらとんでいく」、そういう言葉がほしかったと子ども時代を振り返っていました。

ご紹介したように、お母さんも子どもさんも非常に頑張っています。今日会場にいらっしゃるお父様、保育士の先生方、そしてお医者様、研究者の皆さんにお願いしたいことは、決して母親を追い詰めることなく、「一緒に育てよう」と言っていただきたいということです。そうしたら、母親も子どもたちも、もっと楽しく生活できるようになるのではないのでしょうか。

この「一緒に育てよう」、社会のシステムが子どもと一緒に育てることができるようになるということが、21世紀に働く母親と、その子どもたちを迎え入れるキーワードになるのではないかと私は考えております。

図6 相談先



ベネッセ教育研究所「第2回幼児の生活アンケート」より作成